

平成29年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 藤 松 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生は、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	11.0	74	5.1	57	11.6	77	4.9	44
全国	11.2	75	5.2	58	11.8	79	5.1	46

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	全国平均と同程度の正答率である。「言語に関する知識や理解」に課題が見られ、今後改善に力を入れる必要がある。「話す・聞く能力」を問う問題の正答率が高い。
	よくできた問題	話し合いの様子を聞き取り、適切な説明となっているものを選択する問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	手紙の構成についての理解に課題があり、適切な位置に後付けを書く問題の正答率が低かった。

国語B	全体的な傾向や特徴など	全国平均を上回っている。記述式の問題でも無回答の児童が非常に少なく、正答率も高くなっている。考えて書く力がついてきている。
	よくできた問題	物語の叙述を適切に読み取り、それらをもとにして自分の考えをまとめる問題の正答率が、全国平均を20%近く上回っていた。
	努力が必要な問題	目的に応じて必要な内容を選択し、整理してまとめる問題の正答率が低かった。

算数A	全体的な傾向や特徴など	全国平均を大きく上回っている。無回答問題がなく、どの問題に対しても意欲的に取り組むことができている。
	よくできた問題	計算など技能を問う問題について極めて高い正答率であった。
	努力が必要な問題	1より小さい数をかけたときの積の大小についての理解を問う問題場面の理解に課題があり、数直線等を用いて考える経験を積み必要がある。

算数B	全体的な傾向や特徴など	全国平均を上回っている。国語B同様、記述式の問題での無回答率、正答率に優れ、思考力・判断力・表現力の成長が見られる。
	よくできた問題	問題文から解決に必要な数値を選択し、順序立てて考えるなど「数学的な考え方」を問う問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	平均を求める際の、「飛び離れた数値の扱い」を問う問題の正答率が低かった。

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概

質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> 起床時間が昨年度(5年生時)の調査より安定し、規則正しい生活が送られていると考えられる。「生活ががんばりカード」の活用により、家庭と連携して生活習慣の見直しを行った成果が出たと考えられる。 自分にはよいところがある、将来の夢がある、と考える児童の割合が、昨年度調査より増加し、自己肯定感の高まりがみられる。 全国平均と比較し、平日、土日祝日を問わず、テレビゲームに使う時間が長く、家庭学習や学習塾等での学習に充てる時間が少ない傾向にある。家庭学習の習慣化を図る取組を行う必要がある。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な知識・理解の定着を図る補充学習(時間割に設定済み)やこまめな診断テスト(各教科での練習問題やミニテスト)などを継続して行う。 すきま時間の読書の推進。
--

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> 「生活ががんばりカード」に継続して取組み、家庭と連携して子どもを育てる風土づくりを行う。 「生活ががんばりカード」で家庭学習の取組を一層啓発する。 「うち読」を勧め、読書カードや家庭チャレンジハンドブックの活用を強化する。
